

同志社創立 140 周年記念シンポジウム

「同志社創立 150 周年に向けてー同志社の歴史をどう語り継ぐかー」

同志社 150 年史編纂について

小林 丈 広

はじめに

社史資料センターの所長をつとめております、小林と申します。よろしくお願いたします。この研究会も社史の事業の一環でございますので、猛暑の中で全国からお集まりいただきましたことをお礼申し上げます。座って報告させていただきます。

私は文学部の教員をしています、所長になったばかりですので、今回は聞き役のつもりだったのですが、このような役目を仰せつかりましたので、今後の討論の材料になるようなものと思ひまして、少し資料を付けさせていただきました。なお、今回お配りした資料は、以前社史の方にいらっしゃった高田芳樹さんがお調べになったものを参考にさせていただきましたことをお断りしておきたいと思ひます。ただ、それに付け加えて、私なりにこれまでいろいろところで経験させていただいたことなどを踏まえて、少しご報告をさせていただきますと思ひます。

ここに何冊か、各大学の大学史を参考までに持ってきましたので、また後ほどご覧になっていただければと思ひます。この中で『同志社百年史』は両側に 2 冊ずつ、全体を挟むように置いてございますが、これが 1970 年代に編纂をされました 4 冊の『同志社百年史』でございます。これまで創立 100 年を超えた大学の多く、あるいは大学に限らず、学校法人として、100 年史というものを編纂してこられました。それはそれぞれの学校に携わる方々のアイデンティティーの確認という面と、こうしたものを発行することによって、その学校の価値を高めるなどといった目的があつて編纂されてきたのだ

と思います。また、編纂を準備し、それを完成していく中で、たくさんの資料を発掘し、保存に努めてこられました。それが結果として大学アーカイブというふうには、資料の中では書かせていただきましたが、各大学で資料室ですとか、文書館ですとか、そういうふうなものに結びついていっているように思います。今、私が所長をつとめさせていただいています社史資料センターもそういった大学アーカイブのひとつ、おそらく日本の中でも代表的なアーカイブのひとつだと思っています。

1. 各大学の100年史をめぐる取り組み

そのような過程を振り返るため、他大学の事例を少し列挙させていただきました。まず、これが一番最初のものかどうかは分かりませんが、学校法人の創設が早かったということで、慶応義塾の例を掲げさせていただきました。『慶応義塾百年史』というのは1960年代に編纂され、これも別冊や付録など、各大学史にいろいろなものがありますので、一概に冊数だけでは表現できないのですが、6冊程度のものをまとめておられます。ですから、かなりまとまった100年史の先駆けとっていいと思うのですが、これは塾史編纂所というものが1950年代からございまして、それが100年史編纂を担い、その完成とともに資料室に名を変えていくわけです。こういう形で編纂所が資料室に名称を変えていくというのは、この100年史が完成後、新たな活動に移っていくという、そういう変遷の中で名称を変えていくというのも、こうしてたどってみると分かるんですが、それが1980年代になりますと福沢研究センターというふうになを改めまして、今は専任の教員なども何人か置いて、活発に活動されておられます。そこで、後ほどまたご紹介させていただきますが、150年史の編纂は、福沢研究センターが中心になって行ったと言っているのではないかと思います。

また立教の場合には、まだ正確なところは確かめ切れていないのですが、恐らく編纂室のようなものがあって、そこで100年史を編纂してきたのですが、2000年頃に学院史資料センターと名前を改めまして、例えば125年史などといったものを編纂しておられます。また、立教関係の新聞記事集成な

どというふうなものを編集し、その発行を継続しています。学院史資料センターという名称は、本学とも似ていますが、継続的に資料集の発行を続けておられるというふうに考えていいのだらうと思います。

明治学院の場合ですが、『明治学院百年史』を1987年にかけてまとめているのですが、実は1970年代に通史を1冊出したというのが主な事業で、それに前後して、個別の資料集を十数冊、継続して出されておられます。それらを合わせると十数年間という長期間にわたる事業ということになるのだらうと思います。編纂体制は、最初は広報室のようなところで史料室を立ち上げられたのですが、その後、おそらく資料収集や保存などの観点から図書館の方に部署を移し、そこに資料室を置いた。それが現在は歴史資料館という形になり、1990年代から活発に活動され、資料集を現在も継続して発行するという形態を取っているのだと思います。

こんなふうに戻ってその過程を見ていきますと、それぞれの大学の個性、学校法人の個性とか事情などが垣間見えて大変興味深いように思います。明治学院と同志社のどちらの歴史が長いかというとなかなか難しいのですけれども、明治学院と相前後して取り組まれたのがこの『同志社百年史』ということになると思います。皆さんもよくご存じのように、1970年代に4冊の立派なものを完成されておられるのですが、北垣先生のご報告にもありましたが、社史史料編集所という名称で1960年代から活動を始め、『同志社百年史』を完成してから資料室に。また、大学の方に所管替えといいますか、いろいろあったようですが、2000年代になってから、現在の社史資料センターという独立した組織になって、現在に至っております。

これも史料編集所の時代に『同志社九十年小史』、あるいは『同志社百年史』を完成し、また資料室になってからは、先ほどこれもご紹介ありました『新島襄全集』を完成するなど、活発に活動してこられました。社史の人間である私が申すのも何ですが、ただ私自身が携わってはおりませんのであえて申しますと、こうして振り返ってみると、継続して、熱心に活動してきたと言っていいのではないのでしょうか。日本を代表する大学アーカイブと言っていいのではないかと考えております。また、最近でも、新島八重を取り上げた大河ドラマにちなんで、関係書簡集なども発行しております。

次に、『東京大学百年史』。これは国立大学の例になります。おそらく予算規模はかなり違うのだと思いますが、1980年代に通史3冊、資料集3冊、部局史4冊という立派なものを発行されています。発行された100年史だけを見ると最大規模と言ってもいいのではないかと思います。これと比較しますと、同志社の場合には部局史が編纂されていません。東京大学の場合には、各学部や研究所などの歴史を4冊、独立して編纂しているというのが特徴といえるかもしれません。利用する側の立場から言いますと、部局史の事典的な項目は何かを調べるのには便利です。歴代の教員が誰であったとか、どんな学問分野を重視してきたとか、というようなことを知りたいときには手がかりになります。そのためか、以後、部局史を編纂する大学史も増えてまいります。

関西大学の場合には、やはり1980年代から90年代にかけて編纂されていますが、通史2冊、人物史という形で1冊、資料集1冊。それから年表編というような構成になっているようです。関西大学の場合には、現在も年史編纂室という名称になっており、『年史紀要』というのを継続的に発行されています。その内容は、関西大学関係の新聞記事集成を中心にしているようです。

それから、関西学院の場合にも通史4冊というような規模ですが、これはまた後ほど触れさせていただきますが、2001年に『関西学院事典』というのを発行しており、近年はその改訂版を新たに発行されているところです。

東京大学と並んで規模の大きな100年史だと思うのが、早稲田大学の場合です。これも1990年代に発行されるんですが、通史5冊と、巻数が多いのが特徴です。ここでいう通史というのは、要するに近代の日本の歩みと早稲田の歩みとを関わらせながら、その学校法人に即して近代史を描くという、そういうやり方をしており、本格的な歴史書といえるかもしれません。『同志社百年史』も、通史の描き方は同じように、日本の近代の歩みと同志社の歩みとを関わらせながら書いているので、その姿勢は共通するといえるかもしれません。また、それに加えて、部局史を別巻として2冊編集し、最後に年表、索引編というのを付けておられます。

配布した資料の裏面を見ていただきますと、早稲田大学の場合にも大学史

編集所というところでずっと編纂を行ってきたのを、100年史完成を機に、大学史資料センターに衣替えしたことがわかります。早稲田大学では、その後も『高田早苗の総合的研究』とか、あるいは『大隈重信関係文書』というような浩瀚な研究書や資料集を完成しておられます。『高田早苗の総合的研究』などを拝見しますと、むしろこのような著名な個人に着目した研究は、同志社では人文科学研究所が、同志社関係の社会事業家や宣教師などの研究をまとめていますので、人文研がそれを担ってきたのかなと感じます。ですから、大学アーカイブの事業だけで比較することはできないのですが、比較してみると、以上のように大学によって様々な事情が浮かび上がってきます。

また京都に関して言いますと、例えば京都大学とか、立命館なども同じように100年史の編纂をされてこられています。

また、比較的歴史が浅いといいますが、相対的に少し浅くなるのですが、九州大学などは現在100年史を編纂されていますが、2011年に出された写真集が少し話題になりましたので、こちらも持ってまいりました。ですけれども、これも100年史の一環としてまとめられたので話題になったところもあると思いますが、同志社を含め、これまでもこれに匹敵するような写真集を出している大学はあるのではないかと思います。いずれにしましても、写真集という試みもありますので、今後新しい企画としてどのようなものがふさわしいかを考える参考として持ってまいりました。

大きな流れとしては、やはり100年を超えた歴史のある学校法人は多くのところで100年史を編纂されているわけですが、その成果を受けて、大学アーカイブや資料室というものを設置して、そこで継続的な事業を現在も続けられておられるということだと思います。ですから、次に150年をどのように迎えるかというときには、やはりそういった大学博物館とか資料室、アーカイブなどといったところが、まずは主体となって計画を立て、調査などの実務を担っていくというケースが多いのだと思います。

2. 各大学の150年史に向けた動き

そこで、150年に向けた動きですが、すでに150年が到来したところについて申しますと、まず慶応義塾の場合ですが、こちらに持ってまいりました。これが『慶応義塾史事典』という事典です。つまり、これまで紹介したような通史と資料集などで構成された〇〇年史というものではなくて、事典的なものをまとめるというやり方をしたというのが慶応義塾の場合です。これを記念出版のひとつとしたということだと思います。これを拝見したのですが、同志社でもすでに社史に蓄積されている情報を使えば、ある程度正確なものができるのではないかと感じました。先ほど関西学院の例も申しましたが、こうした方法もあるのかもしれませんが、学外の方にも評価されるものになるかどうか課題ではないかと思えます。

ただ福沢研究センターでは、これと並行して、着実に19冊計画の資料集を計画し、継続しています。これは、記念事業では事典的なものをまとめ、より学術的意義のあるものを福沢研究センターの事業として継続するというやり方をしていると考えられるのだと思います。

また、明治学院の場合ですが、明治学院も2013年が150年だったということなのですが、ここではどうやら学校法人の歴史の見直しをされているようです。もともとは2027年がそれに当たるはずだったのですが、2013年を目途に記念出版という形で『明治学院百五十年史』を2冊本で発行されています。事情はわかりませんが、このような例もあります。

立教の場合には、同志社と似たような時期に150年を迎えるということですが、すでに着手されているということでございます。その他、東京大学のような国立大学の動きは、まだあまりわかっておりません。

大規模大学の先行事例ということでいいますと、早稲田大学ではホームページなどで詳しく情報を公開されていますので、ここで紹介させていただきたいと思えます。

早稲田大学が150年を迎えるのは、同志社より少し遅く、2032年頃の予定なのですが、実はもう2009年から、先ほど理事長からまだ10年あるの

か、もう 10 年しかないのかというお話がございましたけれども、早稲田ではまだあと 17 年程有るのですが、すでに事業がスタートしているということです。私も実際携わっている方とお話をしたこともあるのですが、その方はそれでも少し遅過ぎたのではないかと、焦り気味に仕事に携わっておられます。ただし、全体がどんな構成になるかというようなことにつきましては、まだ進めながら考えるというような状況で、取りあえず最初の通史に取りかかっているようです。

そこで、ホームページなどで早稲田ヴィジョン 150 という「早稲田の核心戦略」というものを拝見していると、その中には 150 年史の編纂もきちんと明記されています。それによれば、2015 年度ということですので、もう今年度なのですが、第 1 巻の執筆を開始するとあり、さらに第 2 巻の構成の検討作業を開始しますというような形で、具体的に以後数年間分の年度計画についても明記されています。また、計画だけではなくて、一昨年度の 2013 年度については、計画がどのように実施されたかというふうなところまですでに公開をされておられます。

さらにもう少し見ていきますと、関連出版物として写真集、資料集、大学事典、人名事典についても検討することになっており、おそらくこの間のさまざまな大学史を参考にして、一通り俎上に挙げるなどして、かなり大きな目標を掲げていることがうかがえるのではないかと思います。

また、何でもパソコンなどで検索できるような時代になっておりますので、今後は、成果をデータ化し、すぐにパソコンで検索できたり、更新できるようにするようなことも求められるかもしれません。確かに、紙ベースの出版物は、出版時点では最新の研究成果でも、数年経つと新史料が見つかったり、間違いが発見されることもあるので、それらをデータベース上で更新したり、ホームページ上で発信できるようにしていくことも必要になるかもしれません。早稲田では、そのあたりのことも視野に入れて感じました。資料センターでは、150 年まではこの記念事業を中心に推進するのだと思いますが、その後の事業についても、継続的な作業や情報の更新なども視野に入れておられるのではないかと思います。

3. 同志社 150 周年に向けて

そこで、最後の検討課題ということですが、このあたりも私としまして、先ほど申しましたように、今日は本当は聞き役で、皆さまのご意見を虚心坦懐に聞かせていただきたいと考えていたのですが、このような場を与えられましたので、ちょっと先走った形ですが、もし 150 年史というようなものを新たに編纂するのであればという場合と、そこまで本格的ではないけれども何らかの記念出版物をする場合という二つのパターンに分けて、検討課題という形でレジユメの方にメモ的に書かせていただきました。

やはり一番大切なのは、先ほどの北垣先生のご報告にもありましたが、事務局だと思います。北垣先生のお話では具体的なお名前も出されていましたが、中心になって事務局を担っていただける方がいらっしゃるかどうか、それが一番大切なことだと思います。本来でしたら、やはり社史資料センターがそれを担わなければいけないと思うのですが、それにふさわしい体制になっているかどうかということもございます。

また、社史資料センターについていいますと、通常業務、たとえばハリス理化学館の展示ですとか、レファレンスなどさまざまな業務がございます。こうした日常的な業務は、もちろん 150 年史をつくる場合の基礎になる重要な柱だというふうに思っておりますが、本格的な編纂を新たに始めるとなった場合には、展示ですとか、資史料の調査・保存といった本来業務に支障が出てくるかもしれない。そのようなことも考えておく必要があると感じております。もし本来業務に支障が来ないようにしようと思えば、社史が調査などの中心を担いながらも、編集については独立したチーム（委員会）を設けるということも考えていく必要があるかもしれません。また、社史というのは大学に付属していると理解しておりますので、より法人全体で編纂ということを、あるいは記念事業ということを考えていく必要があるかもしれません。そういう形になれば、もちろん人文科学研究所などもそうですが、女子大の史料室ですとか、付属の幼稚園から高校までのさまざまな学校からの協力を含めた体制づくりというのも可能になるのではないかというふうに思い

ます。

以上が事務局についてでございますが、もう一つ、やはり北垣先生がおっしゃられましたが、中心になる執筆者、あるいは編集委員のような存在だと思っています。これはご意見の中にもありましたように、原稿調整を最終的にしていかなければ、一貫した通史になりませんので、そういったことを担える教職員の方を、特に働き盛りの50代、40代の先生方の中から見つけ出していけないといけない。これはおそらく1人や2人ではできないと思うのですが、多人数になったからうまくいくというものでもありません。やはり信頼できる何人かのコアになる方々を発掘していく必要があるというふうに思っております。

それから、大学史を取り巻く状況の変化というものもまた一方にございまして、これは日本の近現代史研究というのが、近年非常に実証的になり、『同志社百年史』を企画した50年前に比べると急速に進んでいるということです。ですから、事典や写真集を作るというのが一つのやり方だと思うのは、資史料や情報が増えている中で、中途半端な通史はなかなか評価を得られにくいということがあるのだと思います。ですから、逆にいいますと、この時期に本格的なものが発行できれば、それはそれでたいへん評価され、大学の価値を高めることにもなると思います。そのためには現在、社史でも収集しております学内の公文書を積極的に活用するとか、あるいは退職された教職員の私文書的なものを積極的に調査する必要もあろうかと思えます。また、『同志社百年史』の段階では、おそらく新聞の検索も十分に行う時間がなかったと思いますし、京都府などの行政文書の公開も十分ではなかった部分もあると思いますので、網羅的な検索はできていないのではないかと思います。そういったものの再調査も必要になるのではないかと思います。

以上のような本格的な調査を行うとなると、やはり早稲田の方がおっしゃってられますように、10年あっても足りないというようなことになるかもしれません。そこで、他大学のアーカイブなどでも、毎年新聞記事集成や書簡集を出すなど、集まった資史料を公にしなが、批判を仰ぐというようなやり方をするようになってきているのではないかと思います。

一方、今の意見は、学術的にもきちんとしたものにする必要があるという

観点で申し上げたのですが、一方で近年は読みやすさや利用しやすさというようにことも求められるようになっております。そこで、先ほど述べましたように事典とか写真集などが記念事業として採用されるというのも、そちらの方に比重を置いた考え方なのかもしれません。

そこで、同志社の150年史ということなのですが、これまで申し上げましたように、150年の年に必要になる記念事業と各年度ごとの事業というものを、どこかで仕分けして、整理しながら考えていく必要があると思います。そこで、それを少し整理して申しますと、新聞記事集成ですとか、新島襄の英文書簡集とか卒業生の人物史などといった企画は、もちろん記念事業の中に位置付けることもできますが、記念事業はなくても、毎年社史としては取り組むべき仕事という面もあると思っております。ですから、それらの中のどれを150年に組み込み、何を各年度の事業とするのか、あるいはそれぞれの役割分担をしていくかということも検討する必要があると思います。また、先ほど紹介しましたような写真集や大学史事典、あるいは総合年表のようなものは、やはり節目のときでないとなかなか出しにくいという面もあると思います。いずれにしましても、150周年に何らかの記念事業を行うことで、これまでの出版物で不正確だった情報を確実なものにして、150周年以後のパンフレットや概説書に生かせるよう、信頼性の高いものを出版するというのも、ある意味で記念事業としてはふさわしいものかもしれません。

また、同志社でかねがね、実績がある取り組みとして、キリスト教関係の社会事業家の研究とか、あるいは近年大学史アーカイブなどで研究が進んでいる学徒動員の研究とか、学生運動に関する資料集ですとか、そういったものはもちろん社史資料センターでも今後も取り組んでいく可能性があります。たとえば人文科学研究所の中での研究テーマとしてもふさわしいと思いますので、そういった役割分担も考えていく必要があろうかと思っております。

最後になりますけれども、先ほど理事長のご報告の中でもありましたが、紙の記念出版物と並行して、データベースづくりについても考えていく必要があると思います。そのあたりについても、社史資料センターとしては視野に入れながら、考えていく必要があると感じました。一応、私の方の報告はこれで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。